

〔扶桑略記二十三三〕昌泰四年八月、天台沙門陽勝略○中 慈悲殊深、憐愍愍群迷、蛾虱蚊虻、委身令餌、

〔續古事談五諸道〕昔ハ諸道ノ博士ナドハ、裝束執スル事ナカリケルニヤ、光榮ト云ケル陰陽師、上東

門院ノ御産時、アサマシゲナルウヘノキヌ、指貫ニヒラグツハキテ、ビムモカ、テ中門ヨリイリ

テ、ハンガクシノ間ヨリノボリテ、フトコロヨリ、白虫ヲトリイダシテ、カウランノヒラゲタニア

テ、大ユビシテコロシケリ、ウヘノキヌノシタニハ、ヌノ、アヲトイフ物ヲゾキタリケル、

〔古今著聞集二十十魚虫禽獸〕或田舍人京上して侍けるが、宿にて天道ひなたぼこりして居たりけるに、くびの

かゆかりけるを、さぐりたれば、大なる白虫のくいつきたりける也、それを何となく、腰刀をぬ

きて、はしらを少けづりかけて、其中にへしこめて、はたらかぬやうに、をしおほひて、ぎりさて此

ぬし、おなかへくたりぬ、次の年のぼりて、又此宿にと、まりぬ、ありし折の柱を見て、扱もこの中

にへし入ししらみ、いかゞ成ぬらんと、おぼつかなくて、けづりかけたる所を引あけて見れば、白

虫のみもなく、やせがれて、いまだ有死にたるか、とみれば、猶はたらきけり、ふしぎに覺へて、己

がかひなにをきて見れば、はたらきてかひなにくひ付ぬ、いとかゆく覺へられ共、いまだ生たる

むざんさに、事のやう見んとて、猶くはせをりけるほどに、次第にくいて身あかみけるおりはら

ひすて、げり、そのはひたる跡、あさましくかゆく、かきゐたりけるほどに、やがてはれて、いく

程もなくおびたゞしき瘡に成にけり、とかく療治すれ共、かなはず、つゐにそれをわづらひて死

にけり、白虫は下臍などは、なべてみな持たれ共、いつかは其くいたる跡、かゝる事ある、是は去年

よりへしつめられて、過したる思ひとほりて、かく侍りけるにや、

〔倭名類聚抄十九九九蜻〕野王按如税反、與、芮、今有小虫善嚙人、謂之含毒、即是、

〔箋注倭名類聚抄八八八名〕慧琳音義一引作蜻喜齧人、謂之含毒是也、一引作今有蟲蜻善嚙人、俗謂之

含毒、此即蟲也、一引作蜻小飛蟲子、好入酒中、又有小蟲似蜻甚齧人、名爲蝮子、三引皆與此少異、按